

夢、私たちに。 わたしのひとこと



生涯学習のお手本

佐野 松沢 増美

社会体育に関わり始めてから30年以上が過ぎましたが、その間に多くの人との出会いがありました。それぞれ楽しむ種目や年齢などは違えども、活力に満ちている人たちがばかりで、私が師事している「居合道」の師匠も、その中の一人です。ご子息の送迎で剣道の稽古会場へ顔を出すうちに、その指導者に誘われ剣道を始めたのが42歳でした。その数年後に居合も始められ、70歳の今では剣道五段、居合道は教師七段に昇段されております。更に師匠の歳は衰えを知らず、今年に入り臓器疾患の手術を受け、現在も放射線治療のため、毎日通院しながらも稽古を中断することなく、新たな技の展開に余念がありません。その、まったく気負いや力みを感じない柔らかな立ち振る舞いは、生涯学習の見事なお手本の一つだと思っています。



景観に魅せられて

みそら野 金子 靖夫

白馬に住みついて三年経つ。来る前、富山で仕事をしていて、季節の休みに148号線経由で東京に帰る都度白馬を通った。眼前に迫ってくる北アルプスの景観は、ドイツにいた頃訪れていたオーストリアのチロル地方の景色を髣髴とさせた。"これぞ終の棲"と定年を迎えるとすぐ白馬に来了。四季の彩りは見事なもので、それは歌舞伎の早変わり舞台のようにパッと目の前に現れる。雪の降る音を、ここで初めて聞いた。

世界中で歌われているクリスマスキャロル“きよしこの夜”は、チロルのザルツブルクのすぐ近くのオーベルンドルフ (Oberndorf) という人口5千人ほどの白馬のような小さな村の教会で、地元に住む牧師さんと、友人の音楽教師の作詞作曲で誕生した。真白な雪景色にぴったりの美しい曲だ。白馬にもこのようなキャロルが生まれ歌われたら、どんなに素晴らしいことか。それも村民の作詞作曲で。

クリスマスがくる度に、そんなことを夢見ている。



白馬の将来に思うこと

新田 松沢 正明

「十人十色」、人それぞれ考え方が違うのは、今も昔も同じであるのに、勢いのあった十数年前と何かが違う。

地域が望む住民共通の環境整備が進み、生活しやすくなった反面、「普通の暮らし」を営むために必要な費用が増え、また日本経済の不況で、自身の生活に余裕がなくなったからなのか、自己中心的な意見が多いと感じるのは私だけだろうか。

村政に対して、村民の義務を最低限度はたせる生活の安定、景気回復への努力が更に必要だと考える。

平成の大合併で自立の道を選んだこの村は、これから何に力を入れ、住民に何を求めるのかという明確な政策が打ち出されて当然だと思われる。

まずは個人・地区単位でできることを始め、特色ある村づくりを住民主体で行う大切さを感じ、「小さな輪から大きな輪にする知恵」が必要だと考えている。

編集後記

白馬連峰は初雪を冠り、足早に過ぎる季節の移り変わりを気にしながらの収穫時、稲刈りが済んで、刈田が並ぶ風景もまたひとつの風物詩。今年の米は、カメムシの被害も少なく、収穫量も平年を越えて上々、ご苦労が報われる時でもありません。新米はうまいなど悦に入っている矢先「学校給食に事故米混入」の報道、汚染された米を食品に混ぜて加工し、安く販売したものであるが、給食に使用した理由が「給食費を抑えるためには必要だった」ではあまりにも悲しすぎる。

高橋賢一記

議会報調査編集

特別委員会

議長 西澤 功
委員長 柏原 孝至
副委員長 渡辺 俊夫
委員 池田 和良
小林 英雄
太谷 正治
宮尾 幸典
高橋 賢一